

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：20106

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13057

研究課題名(和文)時康親王・常康親王サロンの研究 遍昭の和歌表現を足がかりとして

研究課題名(英文)Prince Tokiyasu's and Prince Tsuneyasu's salon; Research on expressions in Henjo's waka as a steppingstone

研究代表者

山下 文(YAMASHITA, AYA)

公立千歳科学技術大学・理工学部・講師

研究者番号：20711203

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では『古今集』成立以前に用いられた和歌表現を通して、平安前期から中期にかけて、歌ことばがいかに生成・展開をしていくのかを明らかにした。複合動詞は前項動詞と後項動詞の組み合わせから成っており、表現の創出が容易である。特に遍昭は、比較的卑近な表現を用いた表現を生み出している。また、「扱く(こく)」を前項としたものは多くの歌人たちによって和歌に用いられた。延喜年間には「扱き混ず」を詠み込むことが時流にもなるほどであった。このような経過を経て和歌表現として定着をした複合動詞は、単なる表現としての域に納まらない。「本意(=物事の美的本質)」のある歌ことばとしての性格を有することになるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

和歌は言語芸術であり、歌において歌人たちが創出した複合動詞は芸術的営為の発露とみることができる。ただ、和歌に見える複合動詞に着目した研究は、日本語学の側からのものが圧倒的に多い。また、日本語学における複合動詞の研究でも、韻文としての特質を重視せずに和歌表現を用例として取り上げるものが散見される。本研究は、和歌に見られる複合動詞を和歌文学と日本語学の両側面から取り上げたものである。この点に本研究の学術的意義が見出される。

研究成果の概要(英文)：This research explored how Uta-kotoba (歌ことば) and Hoi (本意) were formed and expanded from the early to the middle of Heian period employing Waka expressions that had been applied before the creation of "Kokinshu". Compound verbs consist of a combination of preceding and following verbs, and compound verbs can create new expression by changing the preceding and following verbs. In particular, Henjo created expressions employing relatively common words. Moreover, words preceding "Koku(扱く)" were often employed in Waka. Employing "Kokimazu (扱き混ず)" in Waka became popular during Engi time. The compound verbs that went through such progress expanded their positions rather than just mere expressions. As a result, they were characterized as Uta-kotoba.

研究分野：和歌文学

キーワード：複合動詞 歌ことば 僧正遍昭 扱く

## 1. 研究開始当初の背景

『古今集』成立以前に、和歌がどのような場で詠まれ享受されていたのかは、未だ明らかになっていない点が多い。本研究課題の申請時に、そのことを論じるための方策として、六歌仙の一人である僧正遍昭（816-890）を手がかりとすることが有意義であると提示した。その理由は、遍昭の和歌にはそれ以前に用いられた形跡のない表現（以下「遍昭の和歌表現」と略）が多く、他の歌人にはない特徴を有しているため、他の歌人との影響関係が比較的容易に見いだせると考えたことによる。また、遍昭は『古今集』成立以前の常康親王歌壇・時康親王歌壇に属していたと目されている。このようなことから、本研究の開始当初は、当時の歌壇やサロンの様相を探るには遍昭の和歌表現を分析することが最も相応しいと考えていたのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、『古今集』成立以前にどのように和歌が詠まれ享受していたのかを明らかにするということを根本的な問いとして位置づけている。本研究の当初の目的としては、その問いに対する答えを導き出す一助として、「遍昭の和歌表現」が当時の歌壇やサロンにおいてどのように享受されたのかを探ることであった。

ただし、研究を進める中で、「遍昭の和歌表現」を他の歌人の和歌と比較することが、歌壇やサロンの様相を明らかにすることには直結しないことが浮き彫りになった。そのため、研究期間の半ばからは、「遍昭の和歌表現」の特徴の一つである複合動詞に着目し、和歌表現がいかに生成・展開してきたのかを追求することを目的として研究を遂行した。

## 3. 研究の方法

本研究では、先行研究<sup>1)</sup>において時康親王・常康親王サロンに属していたと指摘されている、是忠親王・是貞親王・宇多天皇・紀友則・紀有朋・紀有常・壬生忠岑・藤原敏行・大江千里・在原元方・藤原興風・惟喬親王・素性・幽仙・承均の和歌について、「遍昭の和歌表現」との比較をおこなった。また、上記以外の歌人のうち「遍昭と同時代の歌人」と申請者が認定した者については、和歌を諸歌集から抽出し、同様の比較分析を試みた。この方法では「遍昭の和歌表現」と比較するには十分な結果が得られなかった。遍昭の活躍時期は長く九世紀の半ばから終わり近くまでに及び、和歌の用例から歌壇やサロンという集団を想定することが困難であったことが、主たる原因である。

そこで、『古今集』『後撰集』所収のよみ人知らず歌にまで範囲を広げる事も考えたが、作者が明確ではない歌によって歌壇やサロンを想定することもまた困難を伴う。よって、遍昭歌の分析過程で見出された和歌に見られる複合動詞を取り上げ、その語誌を見ることを通して、『古今和歌集』成立以前に「和歌表現」がどのように生み出され享受されたのかを論じることとした。

## 4. 研究成果

ここまで述べてきたように、本研究は当初の研究課題・研究目的とは若干異なる過程を辿っ

てきている。とはいえ、「遍昭の和歌表現」を手がかりにして『古今集』成立以前に和歌がどのように詠まれていたのかを明らかにする、という方向性については変わっていない。その意識のもと、生み出された成果として以下の(1)～(3)の三点を挙げる。

(1) 「僧正遍昭雑考」、『公立千歳科学技術大学紀要』1(1)、2020年3月、22-29頁

遍昭像を多角的に捉えるため、「遍昭の和歌表現」の分析とは別に、僧侶としての事跡をも見てきた。ここに示したのは、その過程における研究成果である。

遍昭は幼少期から仏教的背景を負って成長をしており、そのことが遍昭に関連する諸文学作品の読みにも大きく関わる可能性があることを見出した。具体的には、遍昭の父良岑安世は延暦寺の「檀越」であること、遍昭の兄弟の中に年少期に出家したものがいること、遍昭の祖母に当たる百濟永継は仏教を信奉してきた渡来人の血を引くことなどがある。

従来、遍昭の出家は仁明天皇の死がきっかけとされており、和歌の成立年代を推定する上でも、仏教的性格のある和歌は出家以後のものだと見做されている。しかし、遍昭にとって仏教・出家という行動は非常に身近なものであったと考えられる。このようなことを念頭に置き、和歌や遍昭出家譚が記された諸作品（大和物語・後撰集など）を解釈する必要があることを指摘した。

(2) 「遍昭の複合動詞」(未発表、発表方法・時期ともに未定)

遍昭が用いた複合動詞の中にも、「遍昭の和歌表現」が数多くある。「縊り掛く」「這ひ纏はる」「吹き巻き乱る」「吹き閉ず」「艶めき立つ」「後れ先立つ」などである。ここには、これらの表現の分析に基づく研究成果を示す。

複合動詞の分類方法には様々な観点のものがあるが、前項後項動詞が共に本来の意味を保持しているものを「V型」、前項の意味が薄れ接辞化しているものを「pV型」、後項が前項の意味を補う働きをしているものを「Vs型」として見ると、遍昭はV型が多く、他の型はほとんど用いられないという特徴がある。これは、他の歌人や読み人知らず歌などにもない遍昭の複合動詞表現の特異点である。また、同じ六歌仙歌人であっても小野小町・在原業平はVs型が多いという傾向がある。

このような傾向を示す理由として藤井俊博氏の指摘する<sup>ii</sup>、漢文の影響下にある「翻読語」が関係する可能性が高い。それは、遍昭が仏教に関係の深い家庭環境にあったこと(4.(1)参照)や、遍昭が漢文の素養を父安世から受け継いでいることなどが影響を与えている。

なお、この研究内容は以下(3)の内容を受けたものであるため、最終的な結論や方向性については変化する可能性がある。

(3) 「和歌表現と複合動詞 「扱く」を第一項とする表現を中心に」、『2022年度台湾日本語文学会国際学術シンポジウム(2022年12月10日、於 東呉大學〔台湾〕)において発表予定』

奈良～平安時代の和歌に見られる「扱く」を第一項とする複合動詞(動詞連用形+動詞の形態を取るもの)を取り上げ、その和歌表現としての生成をみたものである。和歌では単純動詞の形で用いられることは少なく、複合動詞の形態で用いられることがほとんどである。

『万葉集』には「扱き入る」「扱き敷く」の2種が、『古今和歌集』では「扱き入る」「扱き散らす」「扱き混ず」「扱き垂る」の4種類が用いられる。

上記の表現のうち、「扱き入る」は平安時代までの用例は全て「袖に扱き入る」の形で用いられている。早い時点でイディオムの一部を占める表現と見なされていたことがわかる。「扱き混ず」は延喜年間の用例が多く、9世紀末から10世紀半ばまでは、複数の物が渾然一体となる様を、視覚的にとらえるのに幅広く用いられていた。しかし、10世紀後半からは素性の「みわたせば柳桜をこきませて」(古今集・春歌上・56)を本意とした歌が多くなる。

日本語学分野からの複合動詞研究は、語構成や格関係などから複合動詞の語としての生成や展開に迫ろうとするものである。一方、本研究は和歌文学研究側から複合動詞の姿に迫ろうとするものである。和歌において詠まれてきた複合動詞の中には、本意(物事の美的本質)を持った歌ことばとして成立したのがあるということを指摘し、今後の複合動詞研究のあり方に一石を投じた。

---

<sup>i</sup> 藏中スミ『歌人素性の研究 平安初期和歌文学の世界』(桜楓社、1980年) 山口博『王朝歌壇の研究 桓武弘仁光孝朝篇』(桜楓社、1982年)。

<sup>ii</sup> 藤井俊博『『源氏物語』の翻読語と文体 連文による複合動詞を通して』(『同志社国文』91、2019年12月、p.1-19)ほか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山下 文	4. 巻 1(1)
2. 論文標題 僧正遍昭雑考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 公立千歳科学技術大学紀要	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山下 文
2. 発表標題 和歌表現と複合動詞 「扱く」を第一項とする表現を中心に
3. 学会等名 2022年度台湾日本語学会国際学術シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------